

「ああッ！？♡♡あ…ッ！♡♡♡」

ズチュッ、ズチュッ……と<sup>はげ</sup>烈しい律動に移られた。

立っているせいか、これまでとなかの感覚がまるで違う。

「すげえ、締まるな……」

「ああ、！♡ああ…ッ♡♡♡」

立っているだけでも、軀の内側には無意識に力が加わっているらしく、寝そべっているときよりも少年の孔は細くなっていた。そこを隆々とした筋肉の<sup>かたまり</sup>塊のようなものが勢いよく出入りするのだからたまらない。

「あああッ♡♡♡ああ…ッ♡♡いやああ…っ、！」

孔内の予想だにしない箇所を<sup>えぐ</sup>あちこち抉られながら、手摺にすがりついて悶絶する。

少年の腰より少し落とした位置から、上に向かって突き上げるようにズチュッ！ズチュッ！と<sup>いれ</sup>挿入られる。そのたびに少年の細腰は男の手の下で跳ねあがり、しだいに脚に力が入らなくなっていく。立てているのが不思議なほどがくがくと震える下半身に、それでも男は容赦なく打ち込んでくる。

「『いや』?なんだ、もうやめてほしいのか？」

律動をやめずに尋ねてくる男の声には、愉快的意地悪さがにじんでいる。

「あ♡♡♡ああ…っ♡♡♡いや…っ、ああ……っ♡♡♡やめ、ないでください…っ  
ア!♡♡♡」

男の雁首に例の好<sup>い</sup>い場所を探り当てられ、擦りつぶされる。

手摺によりかかったまま仰<sup>あお</sup>のくと同時に、髪が逆立つような快感が躰の芯<sup>はし</sup>を疾りぬける。

「あああッ!♡♡♡あッ!♡♡あああああ……っッ!♡♡♡♡」

そんな強烈な快感に貫かれる間にもズクズクと突き上げられては、ひとたまりもなかった。気づいた時には男の手の下で腰を思うさま振りたてながら、美しい夜の街並みに向かって白蜜を噴き散らしていた。

「ああ…っ♡♡」

絶頂の余韻に激しく上下する胸に、男の指が伸びる。

「こっちも弄<sup>いじ</sup>ってやんなきゃなあ？」

「ひ…！♡ああ…っ♡♡♡」

先程よりぴったり軀を押し付けてきた男が、背後から両乳首を指頭でくりくりと転がしてくる。おかげで腰は男の手から解放されたが、その白桃のような尻の間には男のものが突きささったままだ。

「何、腰動かしてんだよ」

クスリと男に笑われ、熱い頬がさらにかあつと熱くなる。

胸で尖る<sup>ふた</sup>双つの粒を緩急をつけてこねまわされるたび、そこからの刺激に連動して下半身をゆらめかせてしまう。深く沈み込んだままの雄茎となかで擦れ合うたび、また先程のような<sup>はげ</sup>烈しい悦楽が欲しくなる。

「あああ……っ♡」

少年の腰遣いに応えるように、男が再度抜き挿しをはじめると。

大きくゆったりとした行き来に、少年の奥深くを掘り起こしでもするかのような上下運動のような動きも加わり、ただでさえ乳首の快感に悶えていた少年をよけいに悩ませる。

「んう…っ♡♡あ…っ♡あぁあっ♡♡♡」

やがてその抜き挿しも速さを徐々に増し、ぐちゅ、ぬちゅ、と濡れた音が響きはじめる。男は少年の乳首を強弱をつけていじりながら、密着させた腰を器用に挑ませてくる。少年の奥を混ぜかえすような下品な腰遣いに、なんだかこちらまでつられて大きく腰を動かしてしまう。

「あぁあっ♡♡♡あぁっ♡んっ♡♡いやあ…っ、あぁっ♡♡♡」

背後の男にほぼしなだれかかるとなりながら、少年は乳首を弄られるたび刺激に従順にのけぞり、感じすぎて気づけばがに股開きのようになった下半身を浅ましく振りたてていた。

「あぁあっ♡♡♡あぁ…っ♡♡あぁあ…っ♡♡ん…っ♡♡♡」

男の動きとこちらの腰の動きとの微妙なズレが、毎回違った擦れ合いを引き起こす。そうしていつまでも新しい刺激にさらされ続け、恥ずかしいのに腰を止める機会を見失う。

「可愛いな、お前」

「あああっ!!!♡♡♡♡」

囁かれると同時に貝殻のような耳を食<sup>は</sup>まれ、ぞくぞくと背がしなる。拍子になかで男をきゅうツと締め付け、下半身が尋常でない痙攣を發したと思った瞬間、強い快感が脳へと突き抜け、まとも白蜜を散らしていた。

「まだ足りないのか？」

少年のなかから抜き去りながらそう言う男だって、まだ一度も達していない。

久々に躰が自由になり、手摺にすがりながら男に向き直る。

「ん……っ♡」

少年を抱きしめながら斜<sup>はず</sup>に屈みこんできた男に唇を奪われる。

体温を重ねられる心地よさに自然と目を閉じ、齒列を割ってまさぐってくる彼の

舌<sup>じゅうりん</sup>に蹂躪されるがままになる。

「んう…っ？あ…っ♡」

何度も角度を変えながら口内<sup>むさぼ</sup>を貪られつつ、片足を持ち上げられる。

そして柵に背を押し付けられ、肩を包むようにもう片方の腕で抱かれたかと思う

と、

「ああ…ッ！？♡♡」

男はふたたび少年のなかへと挿入<sup>はい</sup>ってきた。

男に抱えられた片膝を胸近くまで高々とかかげた状態で、異様によじれた孔のなかを、図太い幹<sup>みき</sup>にまっすぐとぬふぬふ割り拓かれる。

『お礼』を、してくれるんだったな？」

耳元にかかるいたずらっぽい彼の声が、熱い息をはらんでいる。

肉棒にゆっくり貫かれる快感に気が遠くなりながら、あいまいにうなずくと、

「じゃあちよつと付き合えよ」

「ああッ！♡♡」

ズンツと奥に突き当てられた。

そして、

「ああッ！？♡♡あああ…ッ！！♡♡♡」